インドネシア・メダンでの活動報告

津坂　朋宏

1. はじめに

今回の報告内容を説明する。1つ目は、参加したジェネシスプログラムについて、日本語教育の派遣事業に参加し、2011 年2月からの 10 か月インドネシアへ行ってきたことを述べる。2つ目、はインドネシアについて、インドネシアと聞いて、どういったことを想像されるだろうか。インドネシアについての簡単な知識と、実際に体験してきたことについて紹介する。3つ目は、インドネシアでの日本語教育について、インドネシアの都市、メダンでの日本語教育、日本関係機関等について紹介する。4つ目は、私が 10 か月間インドネシアで行ってきた活動について簡単に報告する。

2. JENESYS プログラム

ジェネシスプログラムの正式名称は「21 世紀東アジア青少年大交流計画」JENESYS (Japan-East Asia Network of Exchange for Students and Youths) Programmeである。大規模な青少年交流を通じてアジアの強固な連帯にしっかりとした土台を与えるとの観点から、日本政府により進められた事業で、前の安部総理の時代に作られた。2007 年から5年間、相互理解と友好関係の促進を目的とした交流プログラムを実施した。ジェネシスプログラムの名で様々な活動が日本とアジアの国々の間で行われ、私も全体を把握していないが、日本語教育に関していえば、外務省からの委託事業として国際交流基金が、①日本人の日本語教師の派遣、②アジア諸国の日本語教師の日本研修、③アジア諸国の学生の日本研修の3つを行っていたのを知っている。私が参加したのは日本人の日本語教師の派遣で、プログラム名を「若手日本語教師派遣プログラム」と言い、その第3期後期の派遣に参加した。ただ、この国際交流基金による日本語教育関係のジェネシスプログラムは、与党が自民党から民主党へ移って削減の対象になり、私がインドネシアへ行った 2011 年が最後となった。

第3期後期の派遣先はインドネシア、マレーシア、オーストラリア、ニュージーランド、ブルネイ、ミャンマーの6か国で、インドネシアは私を含めて9名、マレーシアと並んで一番多くの派遣者がいた。マレーシア派遣とインドネシア派遣の一番の違いは、マレーシアでは派遣機関が高校であるのに対して、インドネシアは大学であることだった。

2.1 スケジュール

合格通知と派遣先の決定がされた後、10 月に埼玉県の浦和にある国際交流基金の日本語国際センターで派遣前の研修があった。翌年、1月末に成田からインドネシアの首都ジ

ャカルタへ出発した。1月末に出発、 12 月に帰国で、インドネシアには寒い時期がないと聞いていたので、着ていく服に困った。真冬の日本を出発したが、ジャカルタの空港に着くとむわっとした南国の空気を感じたのを覚えている。ジャカルタにある国際交流基金の日本文化センターでグリーティングを受け、説明を聞き、あと携帯電話、モデム、緊急時用のマスクなどを受け取った。その後 10 日間、JCC（ジャカルタカルチャーセンター）でインドネシア語の語学研修を受けた。そして2月 10 日から 12 月5日までスマトラ島の任地、メダンで生活をした。ジェネシスプログラムの間は一時帰国が基本認められておらず、任地を離れることも合計で 17 日間までしか認められていなかった。また任地を離れるためには届を書いて提出しなければならないこともあり、手続きが面倒だった。私は個人での旅行はせず、なるべくメダンの学生達と共にいた。 12 月6日にメダンを発ってジャカルタへ戻った後、 2011 年 12 月8日に成田へ帰国、名古屋へ帰ってきた。東京は雪が降っていたのを覚えている。

2.2 研修

出発前の 10 月、2週間、日本語教育に関する基本的な知識や日本語の指導法等についての講義を受け、最後にグループで模擬授業を行った。センターの中は、自分の個室、食堂、講義室、パソコン室、図書室など、環境が整っているので、外に出ることはあまりなかった。またこの浦和センターは、外国人の日本語教師が研修に利用する施設で、私が研修に行った時も、外国の日本語教師の人達と共に生活することができ、貴重な体験となった。今もメダンで知り合った人など、全世界からここに日本語の先生が集まって勉強している。ここで出会った人達とは、その後フェイスブックを通して今も交流を続けている。浦和センターに行っている人の様子をフェイスブックで見るたびに、そこでの生活を懐かしく思い出す。

私達には語学研修費用としての予算が組まれていて、その費用を使って事前に日本でインドネシア語を勉強したり、現地で家庭教師を付けてインドネシア語を学ぶことができた。私の場合、地元の語学学校で 2010 年 12 月から 10 回のレッスンを受けて、ジャカルタのJCCで 10 日間インドネシア語を勉強し、任地に入った。やはり任地入りした時はほとんどインドネシア語を話せない状態だった。ここまでがインドネシアの任地で働き始めるまでの準備である。

3. インドネシア

改めて、インドネシアという国について、どのくらい知られているだろうか。2億 3000 万の世界第4位の人口が住むこの国には、世界最多である1万 8000 以上の大小の島がある。インドネシアを地図で見た時の一番左、斜めに伸びている大きな島がスマトラ島である。 2004 年に津波があった場所なので知っている人も多いと思う。スマトラ島だけで日本の1.25倍の面積がある。インドネシアではめずらしい北半球側のスマトラ島にあ

る北スマトラ州最大の都市メダンに行っていた。その右下にあるのがジャワ島で、首都ジャカルタがあるのもこの島である。インドネシアの主な都市はこのジャワ島にある。バリ島はジャワ島の東にある。ジャワ島の上にあるのがボルネオ島で、ボルネオ島にはインドネシア、マレーシア、ブルネイの3つの国がある。インドネシアではボルネオと呼ばず、カリマンタンと呼ぶ。ボルネオと言えば秘境というイメージで、自然の宝庫でもある。私は 2012 年5月から1か月、タラカンという島の高校で日本語を教えてきた。そのタラカン島は、このボルネオの東にある島である。その右にある人手のような形の島はスラウェシ島で、ここはインドネシアではめずらしいキリスト教徒が多い島だと聞く。スラウェシの他には、私がいた北スマトラにも、バタック族という、インドネシアでは珍しいキリスト教徒の民族がある。バタック族の中でも、キリスト教の民族とイスラム経の民族があり、複数のグループに分かれている。さらに東になると、こちらはパプワ島、パプワ地方といった、未開の地というイメージが強い地域になる。宗教も土着の様々なアニミズムの宗教が今も残っていると聞く。

インドネシアの経済は、主にジャワ島で盛んである。インドネシアには多数の民族がそれぞれの地域に残っており、また地域によって一概には言えないが、インドネシア語と、自分の民族の言葉の両方を使う人達がいる。また今は小学校から英語教育が始まっており、高校からは第二外国語の勉強が始まるので、日本人より自然と複数の言語を使うことに慣れているのを感じる。また、だからこそ、統一言語としてのインドネシア語は、文法、語彙においても、簡単なものでなければならなかったのだと思う。私もインドネシア語は比較的馴染みやすい言語だと感じることが多い。

3.1 スマトラ

私はスマトラ島の北スマトラ州にあるメダン市に派遣された。メダンはスマトラ島では最大の都市である。ただ、ガイドブックを見てみると、インドネシアで一番危険な都市として説明されている街でもある。私自身は幸運なことに、一度も危険な目に遭ったことはないが、例えば私がメダンにいた間に欧米人のバックパッカーが、バイクタクシーのベチャという乗り物に乗っていたところ、スリと喧嘩になって刃物で斬られ、そのまま出血多量で亡くなったということがあった。メダンはインドネシアでも特に交通マナーの悪いところで、常に渋滞があり、救急車だからといって道を譲ることもない。そういったことも重なり、刃物で足を斬られたというだけで、出血多量で亡くなってしまったのだと思う。また他のケースでは、欧米人の女性二人組がスリに襲われたという情報が入ってきたこともあった。こういった情報はメダン総領事館からメールで連絡してもらえていた。

首都ジャカルタには 7000 人の日本人がいるが、メダンには 50 人ほどである。メダンは様々な民族がいる街で、マラユ族というイスラム教徒の民族、バタック族というイスラム教だけでなく、トバ湖周辺ではキリスト教を信じている民族、あと中華系、インド系の人達もいる。インドネシアでは中国と国交を断絶し、国内での中国語を禁止していた時期

があったため、政府の支配が強いジャワ島では家族内でもインドネシア語でしか話さない中華系のインドネシア人が多いようである。しかし、距離的にも心理的にもジャワ島から離れているスマトラ島に住む中華系の人達は、まだ中華系同士では中国語を使用している。ジャカルタより、マレーシアのクアラルンプールやシンガポールが近いことも要因の一つかもしれない。また、スマトラ島のパレンバンという地域にいた人達によると、そこではインドネシア語より現地語のほうが勢力が強いと聞く。南スマトラ州にある、ムラユ民族が大多数のパダンという街ではイスラム教の人々ばかりになる。ここも大きな地震のあった場所である。また、津波の被害にあったスマトラ島最北部のアチェ州は、インドネシアでのイスラム発祥の地であり、イスラム教の戒律の厳しいところでもある。基金の規定で、ジャワ島の中央政府と対立し、過去に紛争が起きたアチェに行くことはできなかったが、浦和で出会った私の一番仲のいい日本語教師がいる場所でもあった。津波の際、日本の自衛隊が活躍し、道路を日本と同じようにきれいに舗装してくれたと、アチェの学生から聞いたことがある。北スマトラ大学にはパダンやアチェからも学生が集まる。その中で、アチェから来た学生は日本への憧れが人一倍強いのを感じる。過去にインドとの交易が盛んでアラビアやヨーロッパの血が入っていることがあるために、いくらかそういった特徴のある顔を持っていることや、何より日本人に対する目の輝きの違いから、アチェの学生は、見てすぐ分かることがある。スマトラ島に対して観光地の印象はあまりないが、いくつか、周りに観光名所の島もある。ニアス島の名前はよく聞く。ジェネシスプログラム中には行けなかったアチェだが、 2013 年 2 月に念願叶い、アチェとインドネシア最西端のサバン島に、北スマトラ大学の学生達と行ってくることができた。

3.2 宗教

インドネシアは世界最多のイスラム教徒が住む国である。バリ島ではヒンドゥー教が残ってる。また先ほどにも触れたが、北スマトラとスラウェシ島にはキリスト教の民族がいる。キリスト教はカトリックもプロテスタントもいる。仏教はイスラム教より前にインドネシアの地域に入っていた宗教で、今は主に中華系の人達の宗教となっているが、ジャワ島の有名な遺跡であるボロブドゥールは仏教寺院である。私がいたメダンは、イスラム教、キリスト教の他に、中華系とインド系の人も多いので、仏教寺院やヒンドゥー教の建物もあった。多民族国家のインドネシアであるが、その中でも特に、メダンは多文化が共存している場所だと思う。メダンの人達はリアルに多文化社会を生きているのを感じた。一つそのようなことを感じた経験をここに紹介してみる。

学生の中に仲良しの女の子二人組がいた。彼女達が手を繋いで歩いていたので、どこへ行くのかと訊いてみたら、一人が、これからもう一人の学生がお祈りへ行くから、一緒に行くと答えた。彼女はキリスト教で、もう一人の学生はイスラムの女性の特徴であるジルバブを被ってはいないが、イスラム教徒だった。イスラム教徒の友達が、学校にある祈りをする場所「ムソラ」までお祈りをしに行くので、キリスト教徒の自分も、ムソラの前ま

で付いていって、友達のお祈りが終わるまで待つのだと言う。不思議な思いがした、印象的な出来事だった。

私自身、インドネシアにいる間に、イスラム教の断食に挑戦してみたり、生きている牛を解体して小さくして配る犠牲祭を目の当たりにしたり、また日本人の宣教師の方の家でお世話になって、日曜学校に参加したりした。勉強として宗教を学ぶのではない、大変貴重な経験ができたと思っている。

3.3 教育

インドネシアは基本日本と同じ、小学校6年、中学校3年、高校3年である。教育文化省管轄の学校とイスラムの宗教省管轄の学校もある。メダンでイスラムの宗教大学の学生に会ったことはあるが、宗教省管轄のほうは私はよく知らない。大学では日本の学士にあたる S1 と、ディプロマ課程という D3 と呼ばれる学生が、午前と午後に分かれて、同じ教室を使って学んでいる。 S1 は学士、 S2 は修士、 S3 は博士課程。 S1 は4年制、 D3 は3年制である。 S1 が午前、 D3 が午後で、同じ教室を使うため、午前も午後も勉強している日本の大学生よりはのんびりしているかもしれない。どちらもおおよそ 90 分の授業が1日3回という時間割で、半日で授業が終わるため、日本よりも自由な時間が多いと言える。アルバイトをしている学生も少ないので、朝から昼まで授業がある S1 の学生は、昼からはのんびり食堂などでおしゃべりをしたりインターネットをしたりして遊んでいる。

3.4 インドネシア語

インドネシア語はマレー半島とスマトラ島の間にあるマラッカ海峡の辺りで交易に使われていた言語をもとに作られた。 1928 年インドネシアがオランダから独立するために、青年の誓いと呼ばれる「一つの祖国、一つの民族、一つの言語」によって、統一言語を持とうとしたのがきっかけである。現在マレーシアで使われているマレー語とは、非常によく似ている。語順は基本英語と同じSVOの語順だが、日本語のように目的語を題目語にして文の初めに置くこともできる。また修飾はすべて後置修飾で、日本語と正反対になる印象である。「私の青いかばん」は、インドネシア語だと「かばん　青い　私」という語順になる。日本語と同じ膠着語に分類され、語幹があり、接尾辞、接頭辞の変化によって名詞、動詞と品詞が変わるが、語幹だけでも丁寧さが欠けるだけで、名詞や動詞として使うことができる。多民族の統一言語であるためか、語彙も日本語に比べて一つの語彙で多くの意味を表すことが多い。文字はアルファベットで、ほぼローマ字読みなので、学習したことがない人でも、インドネシア語の文をそのままローマ字読みすれば、インドネシア語を読むことができる。アクセントも厳密にはあるようだが、全く気にしなくても通じるので、学習する時は単語のアクセントは覚えない。英語ではなく、多言語社会で生まれたインドネシア語のほうが、国際語として適しているように思うことがある。ちなみに沖縄料

理「ゴーヤチャンプル」の「チャンプル」はインドネシア語であり、「ミックス、まぜる」という意味である。

3.5 インドネシア人と日本人の違い

以下に私が個人的に感じた、インドネシア人に対する日本人との違いについて列挙する。

日本人以上に色白に憧れが強い。テレビに出てくるアイドルも、日本人や中国人の東洋系や白人が多く、インドネシア人の芸能人も、一見インドネシア人に見えない人が多い。
自分の国にいるより、外国へ行ったほうが幸せになれると考えている人が多くいる。
働かなくていいなら働かずに生活するほうがいいと考える人が、日本人より多い印象を覚える。
時間にルーズで、インドネシアでは「ゴム時間」と呼ばれている。また一人が時間に遅れていたら全員が待つ。スケジュールを守ることより、遅れている一人を待つことを優先する。
初対面でもあなたの宗教は何か、恋人がいるか、歳はいくつかと訊かれる。
自分の顔写真をインターネットに載せたり、パソコンやケータイの壁紙にするのが好き。またフェイスブックで、私の写真を学生のプロフィール写真に使われたり、人の写真を許可無くアップしたり、個人ブログに写真と一緒に名前を書いて紹介されたりした。
病気になった時は、「ゆっくり治してね」ではなく「早く治してね」と言う。
車酔いをしても、風を受けると余計に悪くなると考え、窓際に座らない。
比較的女性に対して「太っている」と言っても冗談の範囲で済む。
叱られても笑顔を見せる。謝らずに理由を言う。
嘘をジョーダンのようにつく人がいる。「おれの彼女は日本人だよ」「バリのホテルのレストランで働いていたんだ」などと言われたことがある。
左手は不浄の手で、物を渡す時は右手でする。
ゴミをポイ捨てするのはインドネシアの文化だと答えることもあるが、自分の国の道路はゴミが多いと嘆く人も多い。

4. 日本語教育

日本語を学習している学生が多い国順に並べると、以前は中国、韓国、オーストラリアの日本語学習者数がトップだった。しかし、オーストラリアの日本語学習者が減少し、代わりにインドネシアの日本語学習者が倍増したため、今は中国、韓国、インドネシアが日本語学習者数においてトップである。インドネシアの日本語学習者が増えた理由は、イン

ドネシアの教育制度が変わり、高校で第二外国語教育が始まったためである。インドネシアの高校が、英語の次となる第二外国語として、どこの言語を取り入れるか考えた時、日本語教育の教材が揃っていたため、日本語教育を取り入れる高校が増えたと聞く。ちなみに私が 2012 年 5 月にいたタラカン第一国立高校では、日本語と中国語を第二外国語教育として取り入れていた。日本語を選んでいる学生の方が中国語より倍以上いた。ただ、インドネシアの日本語学習者が増えても、実感として、教育の質や学習者の到達レベルは決して高くない。例えば、日本語学習者倍増の要因となった高校生達は、日本語を勉強しているといっても話せるレベルには到達しない。日本でいう理系と文系に分かれるのだが、理系の生徒達は週に 1 回学ぶだけである。現地の日本語教師の給料も低いのが現状である。また日本と違って、文系より理系のほうが人数が多い。

中国南京師範大学の先生の話によると、中国では、最近では大学 3 年生で N1 の合格者が出るとのことだったが、私がいた北スマトラ大学では大学 4 年間の授業での履修は N3 まで、個人学習によって N2 が取れる学生は相当優秀な学生である。またインドネシア内でも、首都ジャカルタのあるジャワ島はスマトラ島より教育レベルが高いとされ、インドネシアからの日本の文部科学省の国費留学もジャワ島の学生であることが多いようである。2012 年にスマトラ島から 10 年ぶりに文部科学省の国費留学生が生まれた。彼女は国費留学の試験の前に受けた日本語能力試験で N2 を合格していた。

4.1 メダンでの関係機関

ここでは、主に私がメダンに住んでいる間、お世話になった機関や会について紹介する。まずは、私が配属された北スマトラ大学の文化学部日本文学科(S1)・日本語学科(D3)。スマトラ島で一番大きな北スマトラ大学は、例えれば日本で言う九州大学のようなイメージと言われる。北スマトラ大学の他に、メダンで日本語を学べるハラパン大学は、メダンにある私立大学である。メダンの大学で日本語を学べるのは北スマトラ大学とハラパン大学の 2 校だけである。昔は 3 校あったそうだが減ってしまった。ただ、日本語を学べる高校は多く、 50 校ほどあると聞く。私も仲良くなった先生のいる高校のいくつかへ行ったことがある。主にメダン日本人会のメンバーと盆踊りやよさこいを教えに行った。また、私はまだ訪問したことがないが、観光の専門学校で日本語を教えているところもある。

次に日本語教育に関する学会について。北スマトラ大学はインドネシア日本語教育学会の北スマトラ支部があり、研究発表も行われている。 MGMP は高校の日本語講師の会、PPBJM は先ほど少し触れた専門学校の先生や中華系の日本語の家庭教師の先生達の会である。どちらもひと月に 1 回、勉強会を行っている。 PPBJM のメンバーは中華系の先生達が中心で、最初私はなぜ中国語を教えないで日本語を教えるのかと、訊いてみたことがあった。一人の先生は、財団の日本語教室がおもしろそうで、そこに飛び込んだのがきっかけだったと言っていた。インドネシアでは、こういった人達も日本語教育に携わっていることを知った。

4.2 北スマトラ大学での授業と現状

私は現地の先生とペアになって授業に入るチームティーチングのかたちで授業をしてきた。北スマトラ大学で使われている主な教科書は『みんなの日本語』である。一年生で『みんなの日本語初級Ⅰ』を、二年生で『みんなの日本語初級Ⅱ』を終え、三年生から『みんなの日本語中級』に入る。『初級Ⅰ』が終われば日本語能力試験 N5 、『初級Ⅱ』が終われば N4 相当の学習が終わった目安となる。一年生が終われば N5 が、二年生が終われば N4 相当の学習を終えたことになる。しかし、インドネシアの学校は 9 月始まりで、年に 2 回ある日本語能力試験のうち、メダンでは 12 月の 1 回しかない。学年が始まってすぐの 3 か月後に、日本語能力試験を受けることになってしまう。また『みんなの日本語中級』が終わっても N3 相当の学習までしか終えることができず、四年生になると主に論文指導に移行するので授業数が減る。現状、大学を卒業するまでに N3 を合格するのが目標となっており、 N3 も学年で数人、こつこつ勉強してきた優秀な学生だけが合格できているのが現状である。ジャワ島では学習時間が多いようで、インドネシア全体とは言えないが、在学期間中に N2 以上を合格するためには、北スマトラ大学では学校で学ぶこと以上に、難しい問題を解く自己学習が必要となる。インドネシアでの文部科学省の国費留学の目安がおおよそ N2 の合格ラインであるので、大学の学習でそのレベルの学習ができないことが、スマトラ島からの国費留学生を出せていない原因と思われる。

5.活動報告

メダンでの主な活動は、大学での日本語の指導、日本人会、教師会の参加である。その他には北スマトラ支部での日本語教育学会や日本人会の活動報告会で、自分の小説を教材にした教科書を発表をした。また、北スマトラ大学の弁論大会では弁論者への質問係を、その前はパダンのブンハッタ大学へ行って弁論大会の審査員として参加した。特に新しく学期が始まった 9 月からは忙しくなった。総領事館主催の 9 月の武道祭では踊り手の一人として、毎週の剣道場での練習に参加し、踊ってきた。大学の行事では、新学期の毎年 10 月に、新入生を対象にした「 Gasshuku 」という行事がある。文化祭は 2011 年は11 月に行われ、は学生達と一緒に作り上げた。お化け屋敷、浴衣写真館、クイズ大会、メダンにある寿司屋「すし亭」のすし亭デモンストレーション、日本語カラオケ大会、東北大震災写真館、折り紙教室などを学生達と共に準備した。文化祭では、日本人会の一員としてカラオケ大会に参加した。またよさこいチームを率いてよっちょれを踊った。よっちょれは日本総領事館主催で開いた天皇誕生日の会でも踊ることができた。そして 12 月の北スマトラ大学で行われた日本語能力試験では、試験会場のスタッフとして働いた。

メダン日本人会は、総数 50 人程度のメダンとその近郊に住む日本人の会である。毎月第一週目の金曜日に、日本人会の会議があり、役員として活動してきた。日本人会の活動は、会議の他に、会員同士で親睦を深める野外活動、日本人墓地の掃除、ボーリング大会

があった。また地域の高校に行って盆踊りを教えたり、弁論大会の審査員、文化祭では餅つきと、みんなで盆踊りを練習した。日本人会のメンバーは高齢の方ばかりで、その時25-6歳だった私は若い戦力としてフルに活動した。

福祉・友の会は日系インドネシア人の会である。メダンは戦争時代、もしくはそれ以前から日本人がやってきていた場所である。第二次世界大戦後、日本人の兵隊はメダンに残り、インドネシアの独立のために共に戦った歴史がある。今のメダン福祉・友の会の会長の梅田氏の父親も、その戦争で戦い戦死した兵隊だった。第二次世界大戦後、インドネシア独立の際に戦死した兵隊が眠っている英雄墓地の中に日本人の墓もある。日本関係のイベントの時には、そういった日系の人達とも交流を持つことができた。

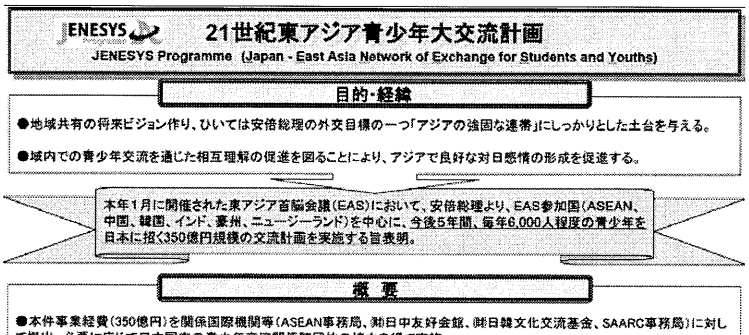
メダンには総領事館がある。総領事館のある建物には、日本の図書室があり、日本の映画上映会や、書道教室、日本人会の会議の場として使われている。メダン日本人会は 50 名ばかりと少なく、また私が日本人会の中で一番若かったため、一番の活動隊員でもあった。当時の日本人会の会長と JICA の協力隊の 2 人の女性と私の 4 人で、よく一緒になって活動した。メダン日本人会の人達との思い出は多くある。宣教師の人の家で「卵かけご飯を食べる会」をしたり、畑仕事を手伝ったり、たこ焼きを作ったり、日本人会の川遊びやボーリング大会に参加したり、カラオケ大会に北スマトラ大学の学生を参加させてみたりした。また、インドネシア最大である日本とインドネシア共同のプロジェクトによって造られた、ダムやアルミの製錬工場の見学にも行った。北スマトラ大学の日本文化祭のために毎週剣道場で盆踊りを練習し、当日はその盆踊りと餅つきをした。弁論大会の時は、日本人会の中から審査員の人を出してもらった。日本にいる時よりも、人の家にお邪魔してご飯を頂いたり、泊まったりすることが多くあった。今でも私がメダンへ行く時はホテルの予約をすることがない。 2009 年に私が中国南京にいた時は、友人はほとんど私と同じ外国人教師だった。それに対して、メダンでは日本人との繋がりがとても強く、また様々なところへ連れていってもらえた。食事にも飽きることがなかった。

6. おわりに

2011 年 12 月に日本に帰ってきてから、 2012 年 4 月に 1 週間、この時は北スマトラ大学の学生達と一緒にパダンのアンダラス大学へ行って文化祭に参加してきた。 5 月から 1 か月、タラカンのタラカン第一高校で日本語を教えた後に、 1 週間メダンに寄ってきた。 9 月末にインドネシアであった JASSO フェアに、日本の日本語学校のスタッフとして参加してスラバヤとジャカルタへ行ってきたが、この時はメダンへ行くことができなかった。 2012 年の Gasshuku に参加する約束を学生達としていたが、 JASSO フェアと日にちが重なってしまい、電話をするだけで参加できず、約束を守ることができなかった。そして 2013 年 2 月に 1 週間、メダンから四年生の学生達とアチェ、サバンへと旅行してきた。しかし、 2013 年 3 月にある文化祭は、なんとか行きたいと思っていたが、私の都合で参加できる見込みが立っていない。

2012 年以降、私を含めて日本人の特に若手が減り、メダン日本人会の戦力は激減しているのが現状である。残念ながら日本語に関するメダンでの進展は少なく、新しい日本人教師が来るどころか、メダンにいる日本人が減ってきている。 2012 年に入学した新一年生達には、身近な日本人がおらず、先輩の学生達から見てもかわいそうだと言う。日本語を使う仕事も、教師以外ほとんどない。メダンに日系企業が増えれば、メダンで日本語を学んでいる学生達にとって、日本語を学んだ次の道ができるので、よいことではあるが、まず何より、メダンの人達は日本人が来ることを待っている。メダン日本人会のためにも、メダンで日本語を学んでいる学生達のためにも、なんとかしなければと思っている。

参考資料　　ＵＲＬ： 2013 年２月に取得



JENESYS Programme　21世紀東アジア青少年大交流計画

JENESYS Programme (Japan - East Asia Network of Exchange for Students and Youths)

目的・経緯

●地域共有の将来ビジョン作り、ひいては安倍総理の外交目標の一つ「アジアの強固な連帯」にしっかりとした土台を与える。

●域内での青少年交流を通じた相互理解の促進を図ることにより、アジアで良好な対日感情の形成を促進する。

本年1月に開催された東アジア首脳会議(EAS)において、安倍総理より、EAS参加国(ASEAN、中国、韓国、インド、豪州、ニュージーランド)を中心に、今後5年間、毎年6,000人程度の青少年を日本に招く350億円規模の交流計画を実施する旨表明。

概要

●本件事業経費(350億円)を関係国際機関等(ASEAN事務局、(財)日中友好会館、(財)日韓文化交流基金、SAARC事務局)に対して拠出。必要に応じて日本国内の青少年交流関係諸団体の協力を得て実施。

●本件拠出金により、具体的には①招へい事業、②派遣事業、③交流事業を行う予定。

招へい事業	派遣事業	交流事業
1. 短期滞在 ●2週間程度。 ●日本の政治制度、経済システム、社会・文化等が体感できるような施設や地方都市を視察。 ●日本の要者・市民との各種交流の場(ホームステイも可能な限り実施。キャンプ、学校訪問、合宿、討論会、セミナー、東アジア学生会議等)も実施。 2. 中・長期滞在 ●1、2ヶ月～1年程度。 ●日本の高校・大学等に留学させ、日本の青少年と共に学ばせる。 ※平成19年度後半以降を目途に順次実施予定。	●将来性が見込める日本人青少年を東アジア諸国へ短期派遣する。 ●招へい事業で来日した各国青少年との交流に参加した日本の高校生・大学生等の派遣も想定。 ●その他、日本語教師派遣も想定。	●東アジア学生会議、東アジア青年の船事業、東アジア青少年ネットワーク事業等の実施を想定。

(http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/china/jc_koryu21/pdfs/sdk_keikaku.pdf)

□ JENESYS若手日本語教師派遣プログラム

JENESYS Programme

JENESYSプログラムとは

2007年から5年間の予定で日本政府が進める「21世紀東アジア青少年大交流計画(Japan-East Asia Network of Exchange for Students and Youths : JENESYS Programme)」のことで、アジア、オセアニア地域の高校生や大学生、教師、その他様々な分野で活躍する人々の招へいや日本の若者の派遣を通じてアジア及び大洋州地域と日本の連携の土台づくりを目的とする大規模な青少年交流事業です。

若手日本語教師派遣プログラムとは

JENESYSプログラムの一環として、大学で日本語教育を専攻したり、日本語を教えた経験のある日本の若者をアジア・大洋州地域の日本語教育機関に約10カ月間派遣し、現地の日本語教師と協力して日本語を教えたり、日本文化の紹介などを通じて、現地の青少年の日本に対する理解と関心を深めてもらうとともに、日本の若者の国際理解を深めることを目的としたプログラムです。

(http://www.jpf.go.jp/j/japanese/dispatch/jenesys_yjt/index.html)